

の3群に分け、舌圧と口唇閉鎖力、顎顔面形態との関連性について統計学的検討を行った。

【結果および考察】最大舌圧は、Skeletal II群と比較しSkeletal I群、Skeletal III群で有意に大きく、嚙下時舌圧はSkeletal II群と比較しSkeletal III群で有意に大きな値を示した。最大口唇閉鎖力は、Skeletal I群、Skeletal II群と比較しSkeletal III群で有意に大きかった。Skeletal III群におけるL1-MPは、Skeletal II群と比較し有意に小さく、下顎中切歯の舌側傾斜を示した。これは、嚙下時に舌が上方に挙上するため下顎中切歯に加わる舌圧は小さく、口唇圧が大きいことにより舌側傾斜を示すと考えられた。また、最大舌圧と嚙下時舌圧、嚙下時舌圧と口腔容積との間に正の相関が認められた。

【結論】小児期における最大舌圧、嚙下時舌圧および最大口唇閉鎖力ともに、前後的な骨格系分類と深く関連しており、Skeletal II群と比較しSkeletal III群で有意に大きいことが示された。また、最大舌圧と嚙下時舌圧に正の相関を認め、これらは舌の機能評価に有用であると考えられた。さらに、嚙下時舌圧と口腔容積との間に正の相関が認められたことから、口蓋形成に舌の機能圧の関与が示唆された。今後我々は、本研究で得られた知見を矯正歯科治療における患児の舌の機能評価に反映させていきたいと考えている。

3) エナメルマトリックスデリバティブを用いた歯周組織再生療法の臨床的評価

○齋藤 弘毅, 羽鳥 智也, 川西 章
鳥居 詳司, 山崎 厚作, 鈴木 幹子
高橋 昌宏, 高橋 慶壮
(奥羽大・歯・歯科保存)

【緒言】歯周組織再生を目的に、根面処理、骨移植およびGTR法が実施され、サイトカイン療法としてエナメルマトリックスタンパク質、FGF-2あるいはPDGFの効果が検討されている。エナメルマトリックスタンパク質を応用した臨床研究は国外で数多く報告されており、国内でもいくつかの報告が挙げられている。日本人を対象とした同様の研究では、術後のPPD減少量の範囲は2.9～4.2mm、骨欠損深さの減少量の範囲は0.8

～2.2mmであると報告されている。一方、国外の報告によると、術後のPPD減少量の平均は4.1±1.6mm、骨欠損深さの減少量の範囲は0.7～3.1mmとされている。

演者らは過去7年間に巨りエムドゲインRゲルを併用した歯周組織再生療法を行い、良好な治療成績を得ている。根面処理に際して、fiber retention therapyの概念を踏まえて低侵襲に行ってきた。

本研究の目的は、奥羽大学歯学部歯周病学分野で実施したエムドゲインRゲルを用いた歯周組織再生療法の臨床成績を後ろ向き研究により評価することである。

【材料と方法】奥羽大学歯学部附属病院三階総合歯科(歯周)にてエナメルマトリックスデリバティブを用いた歯周組織再生療法を施行した25名(平均年齢49.3±10.8歳、男性9名、女性16名)の患者のうち、術後1年以上経過観察を行っている152歯について、ポケット深さ(PPD)、BOPおよびエックス線写真の臨床データを評価した。

歯周炎に影響を与える全身疾患を有するものはいなかった。

【考察】本研究における術後のPPD減少量は2.7±1.2mmであり、統計学的に有意な改善を認めたが、Tsitouraらや、日本人を対象とした複数の研究と比較すると、やや低い結果であった。本研究では水平性骨欠損症例も評価の対象としたことが一因であったと考えられる。

また、骨欠損深さの減少量は2.5±1.9mmであり統計学的に有意な改善を認めた。国内の同様の研究と比較しても、優れた成績であった。国外の研究結果と同程度であった。fiber retention therapyの概念を踏まえて低侵襲に行ったことが良好な予後につながったと考えている。

【結語】fiber retention therapyを考慮してエナメルマトリックスデリバティブを用いた歯周組織再生療法を水平性骨欠損症例も含め幅広く適用した結果、過去の報告と同等の結果を得た。